

連体形の機能の歴史的変化について

—平安・鎌倉時代を対象に—

金水 敏 (大阪大学)

NINJAL シンポジウム

「日本語の名詞周辺の文法現象 —名詞修飾表現ととりたて表現—」

平成 29 年 12 月 23 日 (土) 10:00~17:30

於 国立国語研究所 多目的室

1. 課題

1. 連体形・終止形の合流はなぜ／どのようにして起こったのか。
2. 係り結びはなぜ／どのようにして(生まれ、)滅びたのか。

2. 方法

- NINJAL 歴史コーパスを用いて連体形・終止形の機能を計量的に調査する。

3. 調査対象

カッコ内は推定成立年

1. 土佐日記 (934)
小学館『新編日本古典文学全集』第 13 巻
2. 蜻蛉日記 (974)
小学館『新編日本古典文学全集』第 13 巻
3. 源氏物語「帯木」(1010)
小学館『新編日本古典文学全集』第 20 巻
4. 更級日記 (1059)
小学館『新編日本古典文学全集』第 26 巻
5. 今昔物語集・本朝部 (1100)
小学館『新編日本古典文学全集』第 35 巻
6. 宇治拾遺物語 (1220)
小学館『新編日本古典文学全集』第 50 巻
7. とはすがたり (1306)
小学館『新編日本古典文学全集』第 47 巻

※各底本の冒頭 20 頁分について、「中納言」で「活用形=連体形」および「活用形=終止形」と指定し、

手作業で分類。

4. 用法と用例

| | 934 | | 974 | | 1010 | | 1059 | | 1100 | | 1220 | | 1306 | |
|---------|------|----|------|----|------|----|------|----|------|----|------|----|--------|----|
| | 土佐日記 | | 蜻蛉日記 | | 源氏物語 | | 更級日記 | | 今昔 | | 宇治拾遺 | | とはすがたり | |
| 連体修飾 | 144 | 56 | 187 | 65 | 242 | 84 | 184 | 58 | 168 | 68 | 194 | 61 | 171 | 54 |
| 準体 | 35 | 14 | 33 | 11 | 62 | 16 | 44 | 13 | 21 | 8 | 25 | 8 | 47 | 15 |
| 係り結び | 64 | 25 | 33 | 11 | 38 | 10 | 21 | 6 | 8 | 3 | 11 | 3 | 32 | 10 |
| 接続が・に・を | 7 | 3 | 25 | 8 | 23 | 6 | 61 | 19 | 40 | 16 | 38 | 12 | 41 | 13 |
| 連体ナリ | 4 | 2 | 3 | 1 | 7 | 2 | 7 | 2 | 9 | 4 | 24 | 8 | 14 | 4 |
| 終助詞 | 3 | 1 | 8 | 3 | 6 | 2 | 4 | 1 | 6 | 2 | 15 | 5 | 3 | 1 |
| 連体終止 | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 0 | 5 | 2 | 3 | 1 | 7 | 2 | 7 | 2 |
| ものか・ものを | 2 | 1 | 3 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| やらむ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 |
| 計 | 259 | % | 305 | % | 381 | % | 326 | % | 255 | % | 316 | % | 317 | % |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|
| 終止形終止 | 176 | | 129 | | 107 | | 153 | | 284 | | 187 | | 117 | |
|-------|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|-----|--|

表 1 全体の集計

以下に、各用法の用例を掲げる。

連体修飾

- (1) 解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべきところへわたる。#かれこれ、知る知らぬ、送りず。(土佐、15 頁)
- (2) 近き隣に心ばへ知れる人、出づるにあはせて、かくいへり。(蜻蛉、105 頁)
- (3) 「はやう、まだいと下臈にはべりし時、あはれと思ふ人はべりき。(源氏、71 頁)
- (4) 『武蔵の国の衛士ののをこなむ、いと香ばしき物をくびにひきかけて、飛ぶやうに逃げける』(源氏、285 頁)
- (5) 見れば、頭青き少僧也。(今昔、41 頁)
- (6) 宗とあると見ゆる鬼横座にみたり。(宇治、29 頁)
- (7) 空薫きなどするさまも、なべてならずことごとしきさまなり。(とはず、198 頁)

準体節 (of. 石垣 1955)

- (8) われに似べきはたれならなくに (土佐、17 頁)
- (9) いかうしもあるは、われを頼まぬなめり (蜻蛉、98 頁)
- (10) そも、まことにその方をとり出でむ選びにかならず瀧るまじきはいとかたしや。(源氏、56 頁)
- (11) 上るはとまりなどして、行き別るほど、行くもとまるも、みな泣きなどす。(更級、283 頁)
- (12) 我等蘆岳の道士として、時々参つづ聞しは我等也」と申す。(今昔、33 頁)

- (13) 人に交じるに及ばねば、薪をとりて世を過ぐる程に、山へ行きぬ。(宇治、28頁)
 (14) いつのほどにか、「御文」と言ふもあさまし。(とはず、202頁)

係り結び

- (15) 立てば立つぬればまたる吹く風と波とは思ふどちにやあるらむ(土佐、30頁)
 (16) さななりと見聞ここちは、なににかは似たる。(蜻蛉、106頁)
 (17) その品々やいかにか。#いづれを三つの品におきてか分くべき。(源氏、58頁)
 (18) 水はその山に三所ぞ流れたる。(更級、289頁)
 (19) 我が昔の同法共有し、皆死にけむ。今三人ぞ有らむ。(今昔、32頁)
 (20) 瘤は福の物なれば、それをや惜しみ思ふらん(宇治、31頁)
 (21) 「かなふまじき御気色に見えさせたまふ。いかがはしはべるべき」と申されしかば、(とはず、211頁)

接続表現(が・に・を)(of. 石垣 1955)

- (22) 国人の心の常として、いまはとて見えざんなるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。(土佐、16頁)
 (23) さなめりと思ふに、憂くて、開けさせねば、例の家とおぼしきところのものしたり。(蜻蛉、100頁)
 (24) わがものとうち頼むべきを選らむに、多かる中にもえなむ思ひ定むまじりける。(源氏、61頁)
 (25) せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。(更級、296頁)
 (26) 次の年、妹子亦唐に渡りて、衡山に行たりけるに、前に有し三人の老僧、二人は死にけり。(今昔、33頁)
 (27) 隣にある翁、左の顔に大きな瘤ありけるが、この翁、瘤の失せたるを見て、(宇治、31頁)
 (28) 「何となるべきことにか」と思ひつづけられて、また涙のみ暇なきに、大納言の音するは、おぼつかなく思ひてかと、あはれなり。(とはず、207頁)

連体ナリ構文

- (29) 聞き戯れに聞けるなり。(土佐、31頁)
 (30) いかうしもあるは、われを頼まぬなめり(蜻蛉、98頁)
 (31) 「すべてにぎははしきによるべきななり」とて、笑ひたまふを、(源氏、60頁)
 (32) 来年の司召などは、今年この山に、そこばくの神々あつまりて、ないたまふなりけりと見たまへし。(更級、291頁)
 (33) 此の朝に仏法の伝はる事は、太子の御世より弘め給へる也。(今昔、36頁)
 (34) 大納言より後の事書き入れたる本もあるにこそ。(宇治、24頁)
 (35) 大納言の音して、「御粥参らせらるるにや」と聞くも、(とはず、201頁)

終助詞・係助詞の文末用法

- (36) 棹させど底ひも知らぬわたつみの深き心を君に見るかな(土佐、19頁)
 (37) いとどしう心づきなく思ふことぞ、かぎりなきや。(蜻蛉、101頁) ※係り結びに入れるべき?
 (38) 『いで、あな悲し、かく、はた、思しなりにけるよ』(源氏、66頁)
 (39) 「これが花の咲かむをりは来むよ」といひおきて渡りぬるを、(更級、295頁)
 (40) 夫人答て云く、「此誰が宣へるぞ」と。(今昔、26頁)
 (41) こはいかにして瘤は失せ給ひたるぞ。(宇治、31頁)
 (42) 「今は人に顔を見すべきかは」と、くどきて泣き居たれば、(とはず、201頁)

連体終止構文

- (43) 「時たがひぬる」と言ふまでも、え出でやらず、(蜻蛉、97頁)
 (44) 気色ばめらむ見る目の情をば、え頼むまじく思うたまへてはべる。(源氏、70頁)
 (45) 濃くうすく錦をひけるやうになむ咲きたる。これは秋の末なれば見えぬ」といふに、なほ所々はうちこぼれつつ、あはれげに咲きわたれり。(更級、287頁)
 (46) 文殊の化して生給へるとなむ語り伝たるとや。(今昔、42頁)
 (47) 心着僧正いみじかりけるとか。(宇治、42頁)
 (48) 「大納言の秘蔵して、女御参りの儀式にもてなし、参らせたる」などいふ凶害ども出でて来て、(とはず、209頁)

ものか・ものを

- (49) かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。(土佐、24頁)
 (50) あきにあふ色こそましてわびしけれ下葉をだにもなげきしものをとぞ書きつくる。(蜻蛉、105頁)
 (51) 『君の御心はあはれなりけるものを、あたら御身を』など言ふ、(源氏、67頁)
 (52) 「こはいかに、不浄説法する法師、平茸に生るといふ事のあるものを」とのたまひてけり。(宇治、27頁)

やらん

- (53) 「我をすかしのぼせて、妻のいひつるやうに股など裂かんずるやらん」と恐れ思ふ程に、(宇治、33頁)
 (54) 御返事、もくろみ過ぎしやらむ。(とはず、209頁)

5. 係り結びと関連構文の推移

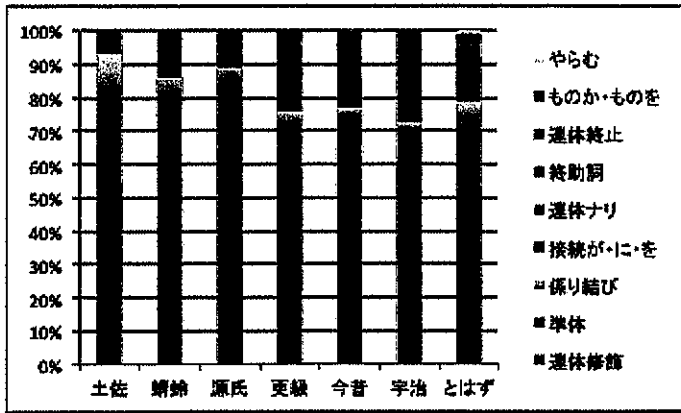


図1 連体形の用法の推移

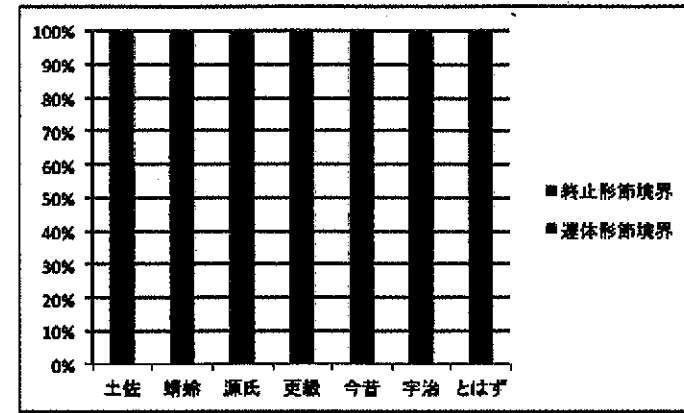


図3 連体形節対終始形節

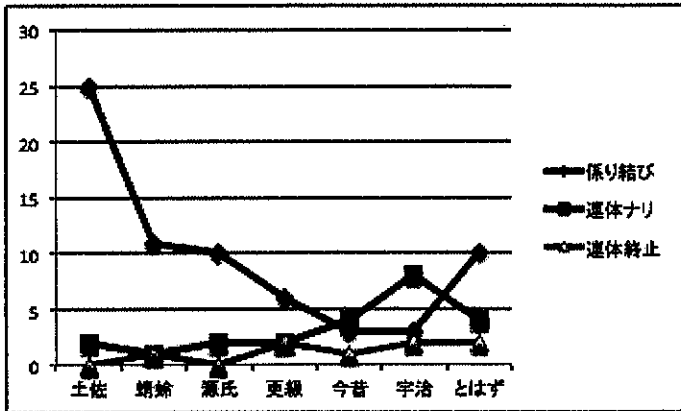


図2 係り結びと関連構文の推移

※ジャンル（王朝仮名文学、説話文学）の違い

6. 連体形と終止形の交渉

| | 土佐 | 蜻蛉 | 源氏 | 更級 | 今昔 | 宇治 | とはず |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 連体形節境界 | 255 | 302 | 374 | 319 | 246 | 291 | 301 |
| 終止形節境界 | 176 | 129 | 107 | 153 | 284 | 187 | 117 |

表2 連体形節対終止形説

※「今昔物語集」に終止形が多いのは漢文訓読文の影響か。

7. まとめと課題

- 資料のジャンルへの配慮が必要であるが、係り結びが時間とともに減少し、連体ナリ構文や連体終止構文が増加する傾向が見える。
- 連体形・終止形の合流について、今回の資料の範囲では兆候は見えず、むしろ資料ごとのジャンルの違いが大きく反映している。
- 今後は、作品を増やすと共に、会話か地の文か歌かというような、用例の位相の違いに着目する必要がある。

参考文献

石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店。

金水 敏 (2011) 「第3章 統語論」金水 敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子 (著) 『文法史』シリーズ 日本語史、3、岩波書店、pp. 77-166。

Kinsui, Satoshi (2015) "On Kakari-musubi and Focus in Interrogative Sentences in Old Japanese (上代日本語の疑問文の係り結びと焦点について)," International Workshop "Kakarimusubi from a Comparative Perspective," September 5-6, 2015 at NINJAL.

金水敏 (2016) 「古典日本語の名詞修飾節再訪—連体節・準体節・主名詞内在関係節・形状性名詞句—」 国立国語研究所・機関拠点型基幹研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾構文の対照研究」研究発表会、平成28年11月19日、於名古屋大学 東山キャンパス。